

3) 通常所見と異なるアマゴのせっそう病発生事例

山本充孝・二宮浩司・山中 治

【目的】マス類で発生しているせっそう病は従来、体側に「せっそう」と呼ばれる膨隆患部が形成される症状が一般的であったが、近年は外観に異常が表れず、腹腔内に出血がみられる症状が増加している。今回、アマゴのせっそう病において通常所見と異なる症状が認められたので、その状況を報告する。

【方法】供試魚：2001年7月に持ち込まれた、異なる2池(AおよびB池、それぞれ4尾)のアマゴについて常法にしたがって診断を行った。

飼育状況：供試魚の飼育状況を表1に示した。

症状および剖検：外観および内臓を観察した。

菌分離：ハートインフュージョン寒天培地(HI培地)、改変 *Cytophaga* 寒天培地(CY培地)を用いて、腎臓および患部(眼球)から菌分離を行い、15℃で培養した。

薬剤感受性試験：8剤についてディスク法による薬剤感受性試験を行った。

表1 せっそう病が発生したアマゴの飼育状況

	池面積 (m ²)	平均体重 (g)	放養数 (尾)	日間死亡 数(尾)	日間死亡 率(%)	飼育密度 (kg/m ²)	水温 (℃)
A池	76.7	91.0	33720	100	0.30	43.0	13
B池	49.5	26.5	51200	50	0.10	15.5	13

【結果】

病魚の症状：

A池；鰓の軽度の貧血、眼球発赤および辺縁の膨張つまり眼球異常がみられた。

解剖所見には特に貧血等の異常はみられなかった。〈写真1、2〉

B池；鰓の貧血、胸鰭の出血および欠損、肝臓の退色等の症状がみられた。

菌分離：細菌検査における分離結果を表2に示した。分離された細菌はすべて褐色色素を産生する白色コロニーで、さらに抗 *Aeromonas salmonicida* 家兎血清で凝集したことから *A. salmonicida* と同定した。菌の分離状況は、A池では腎臓からはほとんど分離されず、患部の眼球から多数分離された。また、B池の腎臓からは多数の菌が分離された。このことから、通常所見ではみられない眼球異常を認めた本症例は、せっそう病であることが確認された。

なお、A、B池ともに *A. salmonicida* 以外の細菌および寄生虫等は認められなかった。

薬剤感受性試験：表3のように OTC、FF に高い感受性を示した。

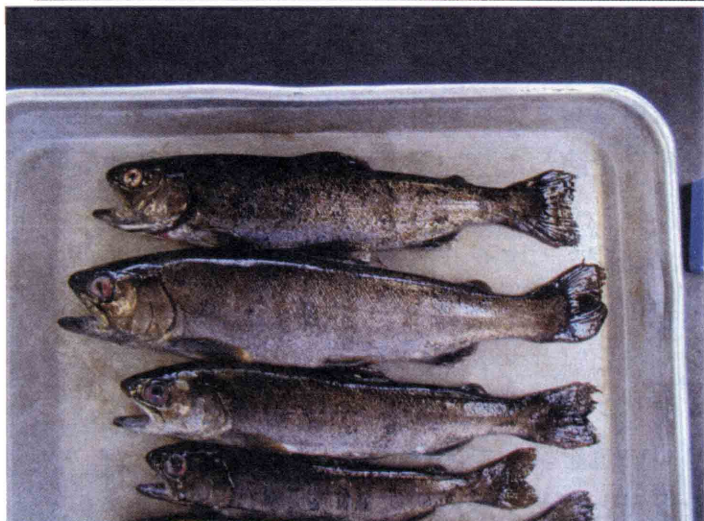
今後の展開：今後は、眼球異常が認められるせっそう病において、常に体内に *A. salmonicida* が存在しにくいかを把握するとともに、本病状を示すせっそう病が飼育環境や魚体サイズに影響をされるのか、ニジマス等のアマゴ以外のマス類でも発生するかを調査する必要がある。

表 2 アマゴの細菌検査における分離菌数 (CFU)

	HI 培地		CY 培地	
	腎臓	患部	腎臓	患部
A 池	1~6	多数	0	多数
B 池	多数	—	多数	—

表 3 薬剤感受性試験結果

薬剤名	略号	阻止円の直径 (mm)	判定
塩酸オキシテトラサイクリン	OTC	28	+++
スルフィソゾール	SIZ	24	++
ニコルスチレン酸ナトリウム	NFS	14	+
オキシソリン酸	OA	0	—
スルファモノメキシン/オルメトプリム	SO	22	++
フロルフェニコール	FF	30	+++
スルファモノメキシン	SMMX	0	—
エリスロマイシン	EM	11	+



〈写真 1〉 眼球異常を示す A 池のアマゴ



〈写真 2〉 頭部の拡大